

第10回 八戸市生活支援体制整備推進協議会 会議録

日時 令和2年1月16日(木) 14時

場所 八戸市庁別館 2階 会議室B

○出席者(8名)

吉田委員、御厨委員、高渕委員、堀内委員、船橋委員、豊山委員、小柳委員、池田委員

○事務局

豊川福祉部長兼福祉事務所長、中里福祉部次長兼高齢福祉課長、中居地域包括支援センター所長、山口主査兼社会福祉士、島田主査兼社会福祉士

開会

島田主査 : 本日は、お忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。次第に入ります前に、資料の確認をお願いいたします。資料は、次第と資料1から資料3までございます。足りない方はいらっしゃいませんか。

本日、出席の委員は8名となっておりますので、八戸市生活支援体制整備推進協議会規則第5条第2項により、協議会が成立しておりますことを御報告いたします。

それでは、定刻となりましたので、ただ今より、八戸市生活支援体制整備推進協議会を始めさせていただきます。私は、高齢福祉課の島田と申します。どうぞ、よろしくをお願いいたします。まず始めに、小柳会長より御挨拶をお願いいたします。

会長挨拶

小柳会長 : 本日はお忙しい中、お越しいただきましてありがとうございます。

あらためまして、新年あけましておめでとうございます。本年も当市の生活支援体制整備事業の歩みを着実に進めるため、これまでと同様に皆様から忌憚のないご意見を頂ければと思っております。

さて、本日は各種取組の進捗状況報告と、地域密着ワークショップの評価・検証を行う予定になっております。お気づきの点につきましては、遠慮なく御発言くださるようお願いいたします。

島田主査 : 小柳会長、ありがとうございました。早速、議事に入らせていただきますので、小柳会長に進行をお願いいたします。

報告案件

小柳会長 : それでは議事に入りたいと思います。

まず、報告案件の「地区ワークショップの実施状況について」、事務局からお願いします。

山口主査 : 高齢福祉課の山口と申します。資料1を御覧ください。第1回住み慣れた地域での生活を考えるワークショップの結果報告について説明いたします。実施日は令和元年11月17日、日曜日。対象地区は白銀南、鮫、南浜、白銀、湊、市川、根岸、南郷の8地区です。当日の参加者数は学生17人、地域関係者30人でした。アンケートの回収数は44枚、内訳は学生17人、地域関係者27人で回収率93.6%です。

地域住民に対して、あなたは、どちらの地区にお住まいですかの問いに対して、御覧のとおりのお返事がございました。多い地区から、市川が7人、鮫が5人、白銀と南浜が4人となっております。年齢を問う設問では、多い順で70歳代が8人、40歳代が7人、60歳代が5人となっております。性別を聞いたところ、男性10人、女性が15人、無回答が2人となっております。地域で行っている活動のうち最も長い活動を聞く設問では、民生委員が7人、町内会役員が3人、老人クラブが2人、福祉協力員、子育てサロン、市民活動、地域見守り隊が1人ずつとなっております。活動年数は多い順から、6年から10年が6人、20年以上が5人となっております。なお、複数回答があったため参加者の実数とは一致しておりません。ワークショップに参加した感想については全体では「参加した良かった」が37人、「何とも言えない」2人、無回答が5人となっております。地域住民のみを抜き出しますと、「参加して良かった」21人、「何とも言えない」1人、無回答5人となっております。学生のみでは「参加して良かった」16人、「何とも言えない」1人となっております。自由記述欄にある地域住民の意見としては、「他地区のことをいろいろ聞いた。」「他地区の悩みを聞くことができ、解決策を見いだすことができた。」「各地域の色々なお話、現状を聞くことができ大変良かった。」「住んでいる地域の見直しができる良かった。」というように前向きなものが多い一方、「楽しかったが、地域課題の解決につながるかというと、ちょっと。」という意見もありました。学生からは「自分の知らない地域の現状を知る機会になったのでためになった。」「自分の知らない地域のことが知れたし、知らない人やこの地域の人とかかわれたのでよかった。」「ニーズがたくさんあり、改善点を見つけることができた。」等、地域住民との意見交換を通じて良かったと感じたとする意見が多くありました。ワークショップは今後も継続すべきかとの設問では、全体では「継続すべき」36人、「何とも言えない」3

人、「無回答」5人でした。地域住民に限ると「継続すべき」20人、「何とも言えない」2人、「無回答」4人、学生のみでは「継続すべき」16人、「何とも言えない」1人でした。自由記述では地域住民から「ワークショップで協議等を通じて検討しても問題解決に至らないが、多くの意見や質問があり参考になる。」「初回開催してからの経過や新たな課題を確認できるから。」「経年によって違った課題が見えてくることもあるし、解決した課題もわかると思うので…。」というように、すぐに課題解決に至らなくても他の人の意見が参考になったとの意見が聞かれております。学生からは「話し合う機会は大事だと思ったため。」「ワークショップをすることで、みんなが話し合っただけの悪いこと・悪いこと、色々な意見があるので、悪いことは改善していけばいいと思う。」「様々な改善点が見つかるので、継続すべきだと思う。」「定期的に行うことで、そのたびに課題などが出てくると思う。」との意見がありました。ワークショップの改善点につきましては、「地域住民参加の促し。」「周知の方法。案内の時期」「参加する人の移動手段がない場合についてどうするか。」「地区ごとに地元（公民館等）で開催できれば、住民の方も多く参加できると思いました。」「高校生などの年代の人も話してくれれば、より良いものができると思う。」「テーブルが広すぎて、ふせんを貼ったり、字を書いたりするのがやりにくかった。人数が少し多いように感じる。話すタイミングをのがす。」等がありましたので、今後の運営の参考にさせていただきます。地域住民が学生と接して思ったこととしては、「良かったと思います」4人、「学生が入る！というのも、とても良かったと思います。若い頃より考える機会があるという点も良いです」「自分よりワークショップに慣れていて助けられました。」「参加した学生の意見など知りたいと思いました。」など好印象の意見が多かったですが、「学生さんの視点でもっと発言してもいいのではと思いました（遠慮しているのかな）。」という意見もありました。学生からは「自分だけだと知らなかったことを知れたのがとても良かった。」「自分が知らないことや地域の方の考えることがわかって良かった。」「自分が知らなかったことを知れました。」など、地域住民との意見交換を通じて充実した学びの場となったとの意見が多くありました。学生に対して地域の活動への協力を求められた場合の考え方を聞いたところ「協力したい」9人、「協力する方向で考えたい」6人、無回答が2人でした。学生からの意見では、「交通費が出るとありがたい」「その場所まで連れて行ってほしい」というものがありました。その他の意見として「バスの利便性が悪いという意見が多くあった。朝夕の通勤・通学時間帯は大型バス（現在のバス）が良いが、高齢者が必要とする時間帯はマイクロバスで本数を増やす方法はないか。」というものがございました。

資料2を御覧ください。第2回 住み慣れた地域での生活を考えるワークショップアンケート集計結果について報告いたします。実施日は、令和元年12月14日土曜日。対象地区は、大館、東、是川、中居林、下長、上長、田面木、館、豊崎 の9地区です。配布数は38枚、当日の参加者数は学生9人、地域関係者29人、回収数は31枚 回収率は81.6%、学生8人、地域関係者23人となっております。

地域住民に対して「あなたは、どちらの地区にお住まいですか。」の問いに対して御覧の地区から参加していただきました。多い順から大館と上長5人、田面木4人、館3人となっており、その他1人は、おいらせ町からの回答でした。地域住民に対して「あなたは、何歳ですか。」との問いに対しては多い順から70歳代が10人、60歳代が6人、50歳代が3人となっております。地域住民に対して、「あなたの性別を教えてください。」の問いに対しては、男性6人、女性17人となっております。地域住民に対して「あなたが地域で行っている活動のうち最も長い活動を教えてください。」の問いに対しては、民生委員10人、老人クラブ、保健推進員が各2人、町内会役員、ほっとサロン地区社協、ほのぼの交流協力員が各1人ずつとなっております。活動年数では多い順から11年から19年が8人、6年から10年が5人となっております。数字は、複数回答があったため、実数と一致しておりません。「ワークショップに参加した感想を教えてください。」の問いに対しては、全体では「参加してよかった」29人、無回答2人となっております。地域住民のみでは、「参加してよかった」21人、無回答2人となっております。学生のみでは、全員が「参加してよかった」との回答であったため、表及びグラフは省略いたします。自由記述では、地域住民からの「参加してよかった」との意見の理由としては、他地区の問題点は当地区の長所（解決済み）がわかった！いろいろな地区も知ることができたから。大学生の皆さん方、そして別な地区の皆さんの考えを知ること、とても参考になりました。との意見があり、また、買物弱者、見て買物したい（スーパー）、移動（バス、大型車）、町内買物ツアーなどの意見がでました。具体的には、住民がお互いに協力して住民の自家用車の乗り合いでスーパーに行ったり、スーパーからの送迎を呼び掛けるなどの意見が出ておりました。また、学生からは、自分の地域に関する知識が増えた。住民が改めて地域の課題をあげたり、逆に強みを引き出せた。他地区の様々な現状を知ることができた。といった意見がありました。「ワークショップは今後も継続すべきだと思いますか。」の問いに対しては、全体では、継続すべき28人、何ともいえない3人となっております。ここで、訂正がございませぬ。表の合計が23人となっておりますが、正しくは31人ですので訂正をお願いいたします。地域住民のみでは、継続すべき20人、何ともいえ

ない3人となっております。学生のみでは、全員「参加してよかった」との回答であったため、表及びグラフは省略いたします。自由記述で地域住民からの「継続すべき」との意見の理由としては、「自分の住む地域の悪い点を見るだけでなく、良い点、長所も冷静に見えた！やはり何事も続けるということはよいことだと思います。」「常に新しい問題点を把握すべき。」「問題解決法を学べた。」「年齢を超えての意見交換。老若男女、幅広い世代が地域のことを考える場面づくりが必要。」など建設的な意見が多く聞かれました。学生からは、「自分の目線では見えない、感じられない地域の実態を知れたため。」「地域課題が大きく視点化され、ニーズを考えることができ、より良い生活に向け考えることができている。」という意見がありました。「何とも言えない」の地域住民からの意見の理由としては、「民生委員等の参加が少ない。」「もっと住民参加者が多いと良かった。」との意見がありました。「ワークショップの改善点があれば教えてください。」の問いに対して、地域住民からは、「今のままでよろしいと思います。」「KJ法は良いのだが、もう少しやりくちを変えたほうが良い。少々まどろっこしい気もする。」「他の地域の方との交流の場もほしい。」「参加者の方が限られているよう。周知が必要。」との意見がありました。学生からは、「知らない人同士で名前を呼び合えるように名札があったほうが良いと思った。」との意見がありました。地域住民は「学生が参加したことについて思ったことを教えてください。」学生が、「地域の方と接して思ったことを教えてください。」のそれぞれからの問いに対しては、地域住民からは、「学生さんたち参加するのはとても良いと思います。」「大変心強くなったのもしいです。」「この企画において最も良い点です。」との意見があり、学生からは、「とても楽しい生活の話やニーズを聞けるので、とても良い経験ができた。」との意見があり、地域住民と学生のお互いから良い関係ができていく意見が多くありました。学生に対して「ワークショップに参加した地域の方々には様々な活動をしています。もし、地域の方から「協力してほしい」と言われたら、どう思いますか。」の問いに対しては、協力したい7人、協力する方向で考えたい1人となっております。学生の自由記述で協力したいとの意見では、交通費や事前に知識を手に入れることができると良い。との意見がありました。「その他、ご意見・ご感想がありましたら、お聞かせください。」の問いに対しては、地域住民からは、また参加してみたいと思います。ワークショップには、社協職員や市民連携推進課の地域担当職員なども声がけしても良いかと思えます。との意見もありました。

小柳会長：ただ今の説明に対しまして御意見や御質問がありましたら発言をお願いします。

高瀬委員：第1回と第2回のワークショップに参加した学生は同じメンバーですか。

山口主査 : 2回とも参加している学生もおります。

高瀬委員 : 分かりました。

審議案件

小柳会長 : その他に、特に御意見等がなければ、次に進めさせていただきます。次は審議案件の「地域密着ワークショップの実施状況及び評価について」、事務局からお願いします。

島田主査 : 私、島田から御説明させていただきます。資料3を御覧ください。前回の協議会におきまして少し御報告しておりましたが、今回まとめてお伝えいたします。地区ワークショップの目的をもう一度確認いたしますと、対象とする地域をより限定することで、地区ワークショップよりも具体的な話題に踏み込めるのではないかとの予測のもと実施するものでございます。また、地区ワークショップは1日で議論に入るため予備知識がないなかでも対応しないといけない側面があります。地域密着ワークショップでは複数回をセットで開催することで、そうしたところを補う意図もございます。

開催は、11月18日、12月16日の2回で、同じ時間帯で対応しております。開催場所につきましては内舟渡集会所ということで、地域の方が自主的に活動しているところにかがって行いました。主催は八戸市、開催協力は八戸学院大学の小柳研究室と池田介護研究所でございます。協力の内容につきましては、小柳様には生徒のフォローを中心にご対応いただき、池田様には地域への周知や会場の運営について御協力いただきました。第1回目につきましては地域を理解するために過去の写真を用いながら、地域のストーリーについて話し合いました。13時30分から始まりまして、簡単にアイスブレイクをしております。お示した写真にある通り、かつてはちいでワークショップをやったときに行ったアイスブレイクで、紙だけでタワーを作って高い方が勝ちというゲームです。大変盛り上がった記憶がありましたので取り入れております。このあと参加者から話を聞いてまいります。かつては公立の病院でも往診をしてくれていた、実は近場でも買物できる場所があったといった話がございました。第2回目は前回の話を踏まえて地域の現在と将来について話をいたしました。

実施状況ですが、住民と学生がほぼ1対1という状況になっております。今回は小規模で実施しようということで、学生は4年生のみの参加としておりましたが、2回目については強く参加を志願してきた3年生1名を加えております。名がテーブルをつなげて2グループに分けて話し合いを行っております。テーブルの中央には紙と付箋がありまして、地区ワークショップを踏襲しております。

そして、挙がった意見ですが、「自宅で倒れた時が心配」「夜間の支援を受けられるか心配」というものがあり、通報装置や駆けつける仕組みが必要とするものでございました。市では通報装置の設置を行っているのですが、これまで協議会や地区ワークショップで話題になってきたように、資源を知らないという問題がここでもあらわになった格好です。「草取りや電球の交換など、ちょっとした手伝いが必要」「近所に頼めると良い」という意見もあり、発言者の意図をくみますと近所で気軽に声を掛け合えると良いという話でございました。「雪かきが大変」という意見があり、一見すると市内の多くの地区で挙がるニーズと同様に思えます。しかし、詳細を聞きますと、内舟渡地区では田んぼのあぜ道を頻繁に利用するのでその除雪がなくて不便ということでした。除雪機が入れない、若者がいないので対処しきれないという意見がございました。「人が集まる行事が少ない」とする意見では、かつて内舟渡地区の路上で祭りが行われていたということでした。「そもそも家族とも交流が少ない」という意見では、地域の交流が少ないだけでなく、兄弟姉妹、子供や孫世代とも交流が少なくなっているという話がありました。これまで、地域の関係が弱まっているという話はよくありましたが、例えば市内に親類がいても交流が少なくなっているという指摘は新鮮であると思われます。「買物に行けるか心配」という意見もありました。ちょうどこのとき、コープ青森さんが買物のためのバスを出しているという新聞報道があり、そのことにも言及がありました。そういったものが内舟渡にもあれば助かるとのことでしたが、どこのだれに頼めば実現するのかわからないという意見が出ております。「介護にかかる費用がよく分からない」という話もありました。例えば施設に入ったら年間いくらかかるのかが明確に情報提供されていない。私も地域包括支援センター職員として費用のことを聞かれることはあったのですが、条件や施設の種類などが多様であるため一概には答えにくい部分でございました。実際にお金を払う側として、しっかり分かっておきたい。どれくらい蓄えておけばいいのかを知っておきたい。というのは当然の意見であると思われま

す。続いてワークショップの評価ですが、運営については池田介護研究所の御協力により市の生活支援コーディネーターの負担を軽減できたと考えております。今までですと市職員が企画、運営などすべてを一括して対応だったのですが、今回は協力者がいたことでスムーズに事が運んだと思います。地域の方が池田さんの顔を知っているので、「参加してみようかな」という気持ちになったというのもあると思われま

のですが、地域特有の事柄はわずかであったと考えております。回数を重ねる中で固有性が見えてくる可能性はあります。実施方法については、2回に分けたことで参加者がより地域への理解を深めたなかで議論することができたと思われま。

今後の対応についての論点ですが、1つ目は地区ワークショップ実施の必要性と継続の可否について、2つ目は仮に取組を続ける場合の方策、3つ目は回のように学生が地域について理解するプログラムは必要か否かの3点に整理いたしました。

小柳会長 : ありがとうございます。事務局からは以上の説明でしたが、今回、内舟渡町内でワークショップをするにあたり、世話役を引き受けてくださった池田委員からも、準備や当日の様子などについてお話しいただけませんかでしょうか。

池田委員 : 準備の手間は少なかったです。幸い内舟渡集会所に大型テレビなどの設備もありましたのでそれを使うかなと思ったのですが、第1回で資料を映したくらいでした。設備も整っているのでやりやすい会場だったのではないのでしょうか。当社の自主事業として健康予防教室を毎週金曜日にやっているのですが、その来場者に周知したことで参加者を確保できました。後日談なのですが、ワークショップで「お祭りをしたい」という話がありました。それを何かの機会で実現できないかと思案しているところでした。

小柳会長 : 当日、私も参加しておりました。写真にある通り、とても和やかななかで、生徒たちが学校で見せないような姿がありました。地区ワークショップでは人数が多くて話す機会を逃してしまうという意見がありましたが、地域密着ワークショップではスムーズに話合いが進んでいたとみております。参加した学生に話を聞いたところ、とてもためになった、楽しかったという感想が聞かれているうえ、また参加したいという話もありました。ワークショップに参加した市外出身の学生がいるのですが、八戸が好きになってきたようで八戸市内の職場に就職することが決まっております。

さて、これから資料に記載されている各論点について委員の皆様から意見を伺う予定ですが、その前に質問等ございませんでしょうか。

高瀬委員 : お祭りの話題が出たとのことですが、これは以前やっていたけど今はやっていないので、可能なら今後開催したいという話ですか。

池田委員 : 一番多かった声が「盆踊り」でした。あれだけ声が挙がるということは、みなさん思い入れがあるのかなと感じております。昔と同じ規模で行うのは難しいかもしれませんが、何らかの形で表現できればと思っておりました。

小柳会長 : 他にもございませんか。それでは論点1「地区ワークショップ継続の必要性と継続の可否について」意見をうかがってまいります。

- 高瀬委員 : 地域にはそれぞれ団体があります。例えば青少協、交通安全協会、防犯協会、町内会。それらともタイアップすることで主催者の負担を軽減してはどうかと思えますよ。
- 小柳会長 : 地域にある様々な組織と連携しながら進めていくというお話ですね。
- 高瀬委員 : そうするとさらに取り組みが広がっていくのではないかと思います。
- 小柳会長 : 御厨委員はいかがですか。
- 御厨委員 : 地区ワークショップは有効だと思っています。実施方法については、複数の地区を組み合わせるのか、より小規模で実施するのかを考えなければいけないですね。参加者の意見を見ると参加を肯定的に見ている様子ですので、もっと続けていってもいいのではないかと思います。各地での意見が似通っているという話がありました。かつて雪かきの件で社協に問い合わせがあった際、地域のボランティアと連携して支援できないかと検討のうえボランティア講座を開催してメンバーを集めることはできたのですが、実働の機会が少なく尻すぼみになってしまいました。青森方面だと雪かき隊が結成されていて定期的な活動があるようなのですけど。
- 池田委員 : 事務局の説明では、各地のニーズが似通っているという話がありました。参加者アンケートを見ると、楽しかったが問題解決につながるかどうかは分からないとする意見もありますので、吸い上げたニーズをどうするかという段階に入りつつのあるのではないかと思います。例えば地域の人集めて実際に生協さんの買物支援の取り組みを体験してもらおうとか。そういう形で進むと周知もできるし、いいのではないかと思います。
- 小柳会長 : ワークショップの後の取組みが必要との意見ですね。
他にご意見が無いようでしたら決をとりたいと思います。まだ手探りな部分はありますが、今後には期待できるということ。課題も見えつつあるということで、継続していく方向性としてもよろしいでしょうか。

【異議なしの声】

- 小柳会長 : それでは継続することといたします。
続きまして論点2「取り組みを続ける場合の方策（改善点や広め方等）について」ご意見を伺います。
- 船橋委員 : 現時点での地域の課題を整理したものが必要ではないかと思います。
- 中里課長 : 大きなところでは買い物手段、交通手段、家の中の細々とした手伝いといったところです。
- 島田主査 : 課長が申したとおりのところが多く、他には集まる場所がないという話もよく出てまいります。これは当協議会でも話題にはしてきたところです。住

民の話を聞いていくと、物が届く、移動できるという手段的なところだけではなくて、人との交流があるとか、地域が活気づくということも重視している様子があります。単に物が届けばいいというけではなくて、町に賑わいがあってほしいので、本当は店舗があった方がいいという話が出てきています。

中里課長 : こういったところをまとめてお示しできるようにしたいと思います。

高瀬委員 : 地域のことを地域で動かしていく。よく互助と言われますが、啓発活動はさらに注力していく必要があると思います。例えば根岸地区には8の町内会があり、その上部に連合町内会。その連合町内会で決めたことを各町内会で実施してくる体制となっている。良い仕組みかどうかは一概に言えないかもしれませんが、何か合意を得る仕組みがあった方がいいのかもしれない。押し付けではなく、雰囲気を作っていく。

小柳会長 : 理想としては各地区、各町内単位で体制を整えていく。住民が助け合いの取組みをすすめていく。そのためにはまとめ役の組織が必要ではないかという意見でございました。

高瀬委員 : 地域の体制を作っていくときには、自助、互助、共助、公助と言われますが、私としては自助の次に近助を入れるべきではないかと。近くの人が声を掛け合って助け合う。こういう言葉があるのかどうかは分かりませんが、近所の助け合いは重要だと考えて言うようにしています。日ごろから近隣の助け合いを根付かせるためにどうしたらいいかを考えているもので。参考までに。

小柳会長 : 近助は初めて聞きましたが、とても良い概念ですね。

他には御意見はありますでしょうか。

これまでのワークショップで蓄積してきたニーズを、参加者にも還元しながら次の議論を行う。また住民の皆さんが何をできるのかについても焦点をあてて話し合っていくことなどを盛り込み、事務局で案を練っていただければと思います。よろしいでしょうか。

【異議なしの声】

小柳会長 : では、最後になりますが、論点3「学生が地域について理解するプログラムは必要か否か等について」お伺いいたします。

地域密着ワークショップは内舟渡の集会所で行われたのですが、学生の多くは「集会所」と名のつくところに足を踏み入れたのが初めてという感じでございました。気分が高揚している様子でした。1回目のワークショップにおいて、内舟渡の歴史が分かる資料が提示され、時代を分けて学生と住民の皆さんが話し合い、あるいは地域の方から教えていただきながら進みました。

これまでも学生サポーター養成研修を開催してまいりましたが、これを修正して学習機会を設けるという方法がありますし、ワークショップ後に反省会を開く、また学生が担当する地区を固定するという進め方もあるかもしれません。皆様から忌憚のない御意見を頂ければと思います。

池田委員 : 学生参加の取り組みは良いものと考えています。地域の人にとっても学生がいることで、教えてあげようとする意識もあったと思います。若い人に接する機会が少ないと思うので、その点でも良かったと。若い人目線の意見があるのも良いですね。

小柳会長 : 地区ワークショップの方でも学生が徐々に打ち解けて意見を言うようになるという姿が見られております。取り組みを継続する中で、より意見を出せるようになっていくのかもしれませんが。

池田委員 : 印象に残ったのは、アイスブレイクで地域の方と学生が一緒になって作業をする場面。これがとても良かったのではないかと。八戸ファミリークリニックの小倉医師が街歩きの取り組みをしていますが、住民と学生が近所を見て歩くのも面白いのではないかと思います。

島田主査 : 研修のような形を考えておりましたが、池田委員がおっしゃるようなイベント形式も効果が期待できるのではないかと思います。

池田委員 : 住民の方が学生に語り掛けるという状況になればいいのではないかと思いますね。

小柳会長 : 歩きながら学生に地域のことを伝えるのも、ひとつの教育プログラムと言える側面がありそうです。

中里課長 : 日々の生活実態が分からないと机上の空論になってしまう恐れがありますので、実際の場面を知ってもらうことが必要だろうと思います。

小柳会長 : 本学の場合は8割程度の学生が部活動に所属しておりますので、実践的なプログラムを好むかもしれません。

高渕委員 : 私も地区ワークショップに参加し学生の先入観にとらわれない意見が確かにありました。時々のを外していることもあるかもしれませんが。これは地域のことを知らない場合があるので仕方のないこと。地域の風土、文化を知ることが、今後を考えるヒントになる場合もあると思いますね。学生さんとしても発展的な意見を言う素地になるのではないかと。私自身楽しみながら参加できました。今後も継続して学生さんには参加してもらいたいです。仮に卒業して市外に就職するにしても、それぞれの地域で何か生かせることがあると思います。もっと参加してくれるとありがたいですね。

小柳会長 : 私も色々な学生に関わりながらイベントへの参加に随行することもあるのですが、ワークショップの方にここまで学生の評価が高いことは珍しいことです。学生たちの期待感や、自身の学習になっているという感覚が確かにあ

るのだらうと思います。地域のことを知ることができれば、一層ワークショップで活躍できると思っているところです。

中里課長 : 先ほど内舟渡町内で盆踊りを復活できればという話がありましたが、ぜひ学生さんも加えてやればいいのかと思いましたが。実現すれば学生にとってもは、意見を言ったかいがあったという思いにつながります。

池田委員 : 他の地域で実践例はあるようです。

中里課長 : 居場所づくりにもつながることと思います。

池田委員 : 若い人の中には盆踊りを見たことがない人もいるかもしれません。

中里課長 : 若者が参加してくれると、さらに人が集まるのではないかと思います。

小柳会長 : 私自身も事務局説明と同じように、机上での学習を想定していたのですが、歩きながら、踊りながら地域の方と交流して、それが居場所づくりなどに発展していくという考え方もあるのではないかと思います。

今後の方向性としては、学生が地域を理解するプログラムについては必要とし、実施方法については委員の意見を参考にまとめてもらうということが良いですか。

【異議なしの声】

小柳会長 : 本日の案件は以上でございますが、他に御発言はございませんでしょうか。

高瀬委員 : 事務局から地域の見守りネットワークに関する資料の提示がありましたが、これは地域の関係者に見せてもよいですか。

中里課長 : 問題ありません。具体的な活動も検討しながらお示しできればと思い、対応を進めているところです。

高瀬委員 : 町内の組織の中に地域の活性化や見守りを担当する役員がいてもいいのかもしれない。連合町内会などを通じて周知すれば、やろうとする地域がもっと出てくるかもしれない。そのためには関係者への説明も大事です。もっとプッシュしてもらえればと思います。

小柳会長 : ありがとうございます。

事務局には今回の意見を踏まえて次年度の計画を立案するようお願いいたします。そして可能であれば次回の協議会で内容を検討できればと思います。

それでは、皆様、御協力ありがとうございました。司会を事務局に戻します。

閉会

島田主査 : 本日も御審議いただきまして、ありがとうございました。

以上をもちまして、第 10 回 八戸市生活支援体制整備推進協議会を終了い

たします。お疲れ様でございました。